

深層わがまち

第3部 地域メディア

実在の場題材 スマホに相

休日、自宅近くを散歩する。屋根上の魔よけの像やさびた町名の看板…。「街にはネタがいっぱい。次はどんな話を書こうか」

地元の金融機関に勤める釣明子さん(60)は京都市中京区は3年前、「作家デビュー」を果たした。

市民のオリジナル小説をインターネット上で公開する「ノベルなび」に作品が採用された。

中学時代、友達との交換日記に物語を書いていた。作家に憧れながらも、進学

7 市民が「作家デビュー」

して就職する道を選んだ。55歳で管理職を外れ、肩の荷が下りた。「あのころ」の気持ち自然によみがえってきた。

そんなとき、ノベルなびに掲載される作品選考のコンクール開催を知った。応募には条件があった。京都の実在の場所を小説に盛り込むこと。「大丈夫。面白い舞台がある」

出勤前、パソコンに向かっていた。題材は近所の路地奥の古い地蔵。地蔵を守りに現れる不思議な「管属さん」

を登場させ、古都らしい小説を一気に書き上げた。約200作が寄せられ、9人だけが入賞した。その1人に選ばれた。驚き、心が弾んだ。

今、65歳の退職後の夢を明確に描く。「ラジオの深夜ドラマのシナリオを書きたい。眠れないお年寄りの楽しみだと聞いたから」

ノベルなびは、府や立命館大、通信会社などでつくる「京都フラワーツーリズム推進協議会」が2009年に始めた。物語の力



小説の舞台として描いた料理店を訪ね、店長と会話する寒竹さん(京都市下京区・田ごと本店)＝撮影・安達雅文

材スマホに掲載



小説の舞台として描いた料理店を訪ね、店長と会話する寒竹さん(京都市下京区・田ごと本店)＝撮影・安達雅文

で観光客を呼ぶ「まちおこし小説」をうたう。ネットを活用した地域振興策の成功例として、全国の観光協会などから視察が相次ぐ。

ノベルなびは11年6月、観光など外出先で利用してもらうため、スマートフォン「アイフォーン」専用の小説閲覧アプリに。入賞作を中心に短編44作品を公開し、利用者は既に2万人を超えた。

書き手は、コンビニでアルバイトをしながら小説家

を目指す青年や小学校教師など多彩な顔触れだ。協議会はさらに、小説を地域経済に直接結び付ける仕掛けも始めている。

若手作家の寒竹泉美さん(33)は下京区は2年前から、協議会が選んだ特定の店や社寺を舞台に短編を書く試みに協力する。

指定店の一つ、下京区の老舗料理店「田ごと本店」に繰り返し足を運んだ。繁華街にありながら静かで落ち着いた雰囲気、料理を口に運ぶたびに、心身とも洗われるように感じたことを、物語に生かした。

祇園祭を絡めた若い男女の恋愛小説に仕上げた。掲

載後、スマートフォンを手に「ノベルなびで興味をかかれた」という若者が訪れたと聞いた。感激した。

京都大大学院医学研究科を修了し、補助研究員として勤めたが、小説家を目指すため1年で辞めた。09年秋に著作の初出版を果たした。

「でも、まだまだ無名。ノベルなびの執筆は字数や舞台など制約が多いけど、筆力を磨くチャンスとと思って挑戦しています」
小説を読んで、誰かが実際に街に出る。「自分の作品が新しい一歩のきっかけになるなんて最高にうれしい」。顔がほころんだ。